
北へ・・・

Haruka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

北へ・・・

【Nコード】

N1333T

【作者名】

Haruka

【あらすじ】

2012年12月22日・・・人類滅亡の日。

孤独なハーフ女子高生である土方カンナ《ひじかたかな》はすべての最後を見届け、逝く・・・はずだった。

だが、彼女は生きた。

武士の時代、江戸時代。

彼女の行った時代、そこは幕末の京。

尊皇派と佐幕派に分かれ、対立しそれは時間が経つとともに拡大していく。

そんな争いの中、祖先と出会い、歴史上の人物達と出会い、別れ、そして、彼女は見つけてしまう。

仲間との友情、信頼、そして、熱くなるほどの愛。

彼女は得意とする剣道を扱い、この世を切り抜け、愛する者のために、友のために戦う。

この激戦の中で、孤独だった彼女が手に入れた物とは・・・

そして、この時代の人間ではないとうに死んでいたはずの彼女の最期とは・・・！

プロローグ

2012年12月22日 午後11時59分59秒 人類は滅亡した・・・

プロローグ

1年前から、何となくだけどニュースでやってた。

・・・よく、・・・わからないんだけど。

何にも、信じる気なんて無かった。隕石だとか、マヤの予言だとか。

隕石って、まだ観測されてないじゃん。

予言なんて、正確だっていう根拠、ハッキリしてないじゃん。

どこに、信じる要素が入ってるんだ！？ って、思ってた。

でも、実際に12月に入ると、なんだか太陽の様子がおかしくなってきたみたい・・・。

実感がわかなくて、無駄な時間を過ごしている気がする。

世界中では、パニックが起こってるって言ってるのに。

馬鹿馬鹿しいと思う。 強盗とか、無差別殺人とかが急に増えて。

この現代は、臆病者ばかりだ。 死という選択肢を持ってない。

だから、恐れて暴れ出すんだ。

国が正式に発表すると、もっとパニックに陥った。

今まで、音沙汰が無かった両親が、馬鹿みたいに帰ってきて、あたしに抱きついて泣く。

何もかもが、今更過ぎる。

ずっと、あたしと共にあってくれたのは、この勇気ある刀だけ。

だって誰もが自分を一番に優先して生きる。 だから、友達なんてのは作らない。

自分が不利になったとたん切り捨てられるだけだから。

それに対して、この刀は過去、主を信じて戦っていた。 勇気ある

この刀を誇りに思う。

だから、最後まで傍にいるのはこの刀だけ。

みんな、地下に潜り込んで。 入りきれないからって、争ったりして。

でも、あたしはなるべく山の頂に近いところへ。

よく、見たかったから。 見届けたかったから。

この刀と共に 終わりを見たかった。

もう、終わるといふのに、夜空は輝く星でいっぱい。

違う・・・最後だから、・・・思いつきり輝くんた。

とつとつ、滅亡のとき。

白くまばゆい光が地球全体を包み込んだ。

「・・・ありがとう。兼定」

と同時に、腕時計の針が動くのをやめた。

今日、あたしは、この北海道で死んだ。

勇敢で大切な友と一緒に・・・

時代

あたしは、死んだ・・・はずだった。

（時代）

人類の終わりの時、白い光が目に入り込んで、世界もろとも無くなった。

もちろん、あたしも。

でも・・・今、目の前にあるのは・・・無くなったはずの、人々と町。

だいぶ、昔くさい気はするけれど。

「おい、お前。 異国の者か？」

・・・異国？・・・。

「半分だけ、そうよ。・・・それが何？」

母が、イタリア人で、あたしは母親似。

だから、日本人ってよりは、イタリア人ってほうが正しいのかも。

まあ、親になんて、似たくはなかったけど。

「……異国は、打ち払うべきだ。」

突然、あたしの目にそいつの腰にあるものが映った。

ああ……。

こんな所で、習っていた剣道が役に立つなんてね。思ってなかった。

あたしの頭上ではキラリと鈍い光がはなたれた。

条件反射で、手に持っていた刀の鞘で刃を受け、素早く払った。

ここがどこなのかも分からないって言うのに、あたしは走り出す。

ただ、いきなりここに来た理由が知りたくて。

そのためには、ここで生きなきゃいけないくて。

謎の少女

?・・・何だろうか。あの女子・・・。

（謎の少女）

私は、少し買い物をして帰ろうかと町の中を歩いていたところなのだが、

突然金色をした何かが、向こうから走ってきた。

すぐに女子だとはわかった。なんだか、不思議な雰囲気をもった子だ。

今日は天気が良くて、彼女の金髪はきらきらと太陽の光を反射していた。

それに、異国の服に似ているようなものを身にまとっている。純粋に興味がわいてね。

ちょうど、浪士に追いかけていたようだったから少しだけ、助けてあげてはと思った。

そう思っていたのに、彼女は、私の目の前で足を止めて浪士に向き合ってしまった。

面白くない。そう思った。

「しょうがないわね。・・・相手してあげる。もう、逃げないんだから。」

なんとも、気の強い。

おかげで、余計に興味がわいてしまった。

「君は、避けててもらえる?」

「嫌よ。邪魔しないで。他人の手なんか借りたくないのよ。」

彼女は、私の目をちゃんと見て言った。

目が、見惚れてしまうほど美しかった。茶色っぽいのが、金色がかっている。

その目を見ると、血で染まってきた身体全身が、心が洗われていくようだ。

「うあああ!」

いきなり、浪士が、彼女に斬りかかった。

私は、間に合わなかった。助けることなど、出来なかった。

そう思った矢先、高い金属音がした。

彼女は、いつの間にか刀を抜いて浪士の刀をはじき飛ばしていた。

居合いだ。　彼女は、剣が使えるのか？

・・・刀は、妖しくも美しく輝いていた。

彼女が使うからだろうか。　剣が生きているようで妖しい光を放つ。

浪士は、手がしびれて小刻みに震えていた。

そいつは、彼女を恐れたのか走って逃げていった。

「ちょっと、その人。」

「あ・・・ああ。なんだ？」

私は彼女の、刀をはじき飛ばす程の力に驚いていた。

「今は、何年？それと、ここはどこ？」

よく、わけの分からない事を尋ねてくるが、きっと困っているのだ
ろうと応えてやった。

「今は、元治元年の6月5日だが？」

「そう。」

そう言って、彼女は刀を鞘に納め、歩き出した。

だが、私はどうしても気になった。

「少し、待ってくれないか？ その格好では、目立つだろう？ おいで。」

彼女も、目立つと思ったのか、渋々ついてきた。

彼女は、女子にしては、私には及ばないが背が高く、足や腕は細かった。

しかし、なかなか良い体つきだ。

・・・男だとしても、このような事を思ってしまうのが恥ずかしい。

彼女は、無表情で無言だった。

人形の様だと思う。肌は、日本人には無い、異人独特の白さと透明さがあつた。

だが、どこか日本人らしさも持っている様に感じる。

何なのだろうか。彼女に、何があつたのだろうか。

会合

今、カンナは窮屈な思いをしていた。

これも、あの訳の分からない男のせいである。

「ちょっと、何すんのよ。きつい・・・。」

・・・

「どうだい？」

男はひよっこりと顔を覗かせた。

・・・目が輝いている。

「ああ。・・・やっぱり、君にはその着物が似合ってる。綺麗だよ。」

カンナは、目を細め、さらに眉間に皺を寄せた。

着物の帯を思いっきりしめられ、窮屈で仕方がないという顔だ。

「・・・あんた嫌い。・・・じゃ。この着物、ありがと。」

着物を着たままその呉服屋を出ようと一歩ふみだす。

しかし、2歩目はかなわなかった。

「ちょっと、まちなよ。着物を贈ってあげたんだから、すこし付き

合つて。」

男は、ニヤリと笑つた。

カンナに、この男の感情は読めなかつた。

「何処？」

「ちよつとした宿に。これから、大事な集まりがあるんだよ。」

(・・・幕末6月5日の集まり・・・?)

カンナは、歴女としての知識を掘り返していた。

「あたし、カンナ。あんたの名前つて、桂小五郎? だったり。」

男は、表情も変えずにくすり笑つた。

「さあ? どうだろうねえ。　僕もわからないよ。どれが、本当の名前かなんて。」

(こんなホストみたいな男が、後の木戸孝允?
・・・維新の三傑さんけつの?)

「まあ、だとしたらちよつといいかも。　会いたい人が居て。」

「そう?　良かったよ。」

桂は、少し疑うような目つきをしたが、すぐに元へと戻した。

カナナは、確信していた。
この集まりが、尊皇派の会合であり、
企てている計画が、失敗に終わることも、
そして、カナナの持つ刀の持ち主が現れることも全て。

（桂には悪いけど、あたしは、佐幕派なの。尊敬してるひとがそうだから。
着物の借りは、いつか。）

宿に着いて、カナナはひとり、部屋の隅で座り、刀を見つめていた。
相変わらず、変な視線は感じるが気になどしない。

（やっぱり、あの池田屋事件か。・・・ちょっと危ないかも。）

カナナは、静かに立ち上がり、厠だと言って少し抜けた。
外へ出て、周りの様子をうかがい、ある男と目が合う。
見かけは商人。・・・でも確か・・・

「ちょっと、その薬屋さん。あたしに薬をうってくださいな。」
カナナがそう言うと、男は、じんわりと汗をかきながら来た。

「今、胃が痛い。それに効くものはある？」

「へえ・・・。」

男は、カンナを敵だと思いこんでいる。
カンナは、薬を受け取って、その薬の包みにボールペンで何かを書き出した。

― 会合は池田屋。 副長へ報告を。 ―

男は、目を丸くしてカンナを見た。
カンナは、頷く代わりに瞬きをする。
そして、この文を残さないために、水も無いまま薬を口に放り込み、包みは粉々に破って、男の頭の上に散りばめた。

「見て。 紙吹雪。 ・ ・ きれいでしょ。」

久しぶりにカンナは笑った。

男の、驚いてから一気に気の抜けた顔が面白くて。

「ああ、ごめんなさいね。 お仕事の邪魔しちゃったかしら。」

「いえ。 ありがとうございます。」

カンナは、早歩きで去っていく男の後ろ姿に手を振った。

（良かった。 ちょっと、安心。 ・ ・ ・ 後は、待つだけか。）

だんだんと日が暮れ、志士達も酒で酔ってきたようだ。
そんな時でも、刻一刻と、あの歴史的大事件は迫っていた。

舞い込んだ蝶

「あの人の予想が珍しく外れましたね。それに応援も来てないみたいですよ。」

「・・・ああ。仕様があるまい。行くぞ。」

宿の外には、浅葱色をまとった者達が数名。

とうとう、このときがやってきてしまったのだ。

宿内は、相変わらず・・・いや、先にも増して泥酔者が増えていた。

それにカンナがため息を吐くと、桂がふと立ち上がり、外へ出て行く。

「ちよつと、逃げるの？」

「まさか。周辺の見回りさ。」

桂は、また読めないような笑顔を作り、さっさと出て行った。

この男は、見回りをしていてたまたま異変に気づき、一人逃げたのか、それとも、もともと気づいていて仲間を置いて逃げたのか。わからない。

だが、これだけは確かだろう。

桂は、ここに戻らない。カンナさえも置いていく。

しかし、それとは反対に、桂はこっさり戻り、手招きでカンナを呼んだ。

そして、何も言わずに足早に手を引き、歩き出した。

「やめて。・・・今更なによ。」

「あの新選組がここに討ち入ってくる様だ。逃げる。」

簡潔に内容を言って、また歩き出すのだが、カンナは桂の手を振り払った。

「とんだ腰抜けね。・・・」

カンナは反対方向に堂々と前を見据え、男顔負けの度胸を見せつける様に一歩一歩を踏みしめる。

桂は、舌打ちをしてカンナに背を向けた。

この男にとって、カンナのこの行動は悔しいものであったことだろう。

女子に腰抜けと言われ、女子は逃げようとする自分を否定するかの様に

堂々とした背中を見せつける。

(・・・っ・・・。ああ。僕は腰抜けさ。

だが、この時代では逃げる者がより長く生きることもある。それに、僕はここで死体をさらすわけにはいかないのさ。)

桂は、カンナの雰囲気や性格を大層気に入っていたのだがほんの短い時間しか見ることは敵わなかった。

桂が見たカンナの刀を持つ姿は、美しくも勇ましく、

戦場に向かう武士と同等にたくましかった。

裏口から宿を出て、なるべく遠くにと走っている最中、太い男の声を遠くで聴いた。

「新選組だ！！宿内を改める！！」

（かな、あいつらを頼んだよ。）

しかし、悲しいことに桂のこの願いは聞き入れられない。

この男は、思い違いをしていた。

カナナは佐幕派であり、尊皇派ではない。

故に、桂の仲間ではなく、新選組につくことになる。

舞い込んだ蝶 其の貳

カンナは、太く男らしい声を聴いた。

「新選組だ!!!宿内を改める!!!」

口元は緩むばかりである。

カンナは心を弾ませていた。

なぜなら、とうとう会いたかった人物と対面することが出来るからであった。

浪士たちは、新選組のかけ声ですっかり酔いが覚めてしまったらしく、

皆刀を手に立ち上がり、ある浪士は二階である窓から飛び降り、またある浪士は

勇敢に立ち向かってゆく。

部屋の外へ出て行くと、そこはもう地獄絵図のように恐ろしく血で染まっていた。

血のりなんぞではなく、紛れもなく本物である。

むせかえるぐらいに濃く漂う匂いにをかいだことのないカンナは胃から上がってきた

ものをぐっとこらえた。

何人もの人間が、犯罪と言われる殺人を平気で行っている。

変な感覚である。しかし、自然と恐怖は湧いてこなかった。

カンナの心に湧いてくるのは、哀しいという感情だけだった。

現代では、哀しいと言うよりも醜いという言葉の似合う人間が多かったが、

この幕末の時代は、哀しい者ばかりであると。カンナには、人を斬るときの目が泣いているようにしか見えなかった。

皆、同じ目をしている。

現代には、歴史が面白い。だとか、武士はかつていいなどと軽口をたたくものが

居るが、武士とは歴史とはそんなに軽いものではない。

酷く辛くて重いものなのだ。

この時代では、刀を振るう者皆、殺したという罪悪感を背負って生きている。

ならば、その罪悪感の重さを少しでも軽くしてやりたい。

カンナはそう思ってしまふ。

ゆっくりと手元の刀を抜き、なかなか出なかった足を前へ出した。カンナは、彼女を仲間だと思っていた浪士を思いっきり斬りつけた。血しぶきが上がり、新品の着物に染みる。

人を斬ることに、少々ためらいは有ったが、一度斬ってしまえばそうでも無くなってしまうた。

冷たい人間だとカンナは自分で思う。

しかし、カンナはどんどんと浪士を斬っていく。

彼女の瞳に暖かみなどありはしない。

冷たいが、それでも尚美しい瞳がそこにはあった。

・・・

「総司！！しっかりしろ！総司！！！」

突如、心配するような哀しい声が響き渡った。

カナナは、本で読んだことがあった。
新選組1番隊組長沖田総司は池田屋事件の最中、喀血し倒れたのだと。

助けなければとつさに沖田の元へと駆けた。

声のする方へ行ってみれば、浪士の死体が床を埋めていたが、その中に

一人だけ浅葱色の羽織を羽織った若い男が倒れていた。

彼の手が血で染まっている。

喀血する際、手で口を覆ったのだろう。

・・・となれば、あれは確実に沖田である。

近くには、何度も何度も沖田の名を呼ぶ大柄の男が彼を守るように立ちはだかっている。

見たところ、年齢的に新選組局長である近藤勇だろう。

「局長ですよ。沖田さんはあたしがしっかりと外まで運びます。避けてはもらえないでしょうか？」

カナナは、斬られるという最悪の場合も想定して向かった。

「し・・・しかし！」

「お願い。あたしを信じて。あたしが沖田さんを守ってみせる！」

近藤も考えてる暇なんて無い。

沖田も、ずっとここに倒れていては、浪士に不意を突かれ斬られてしまう。

「・・・わかった！！任せたぞ！！！」

「はい！！！！！」

カンナは、沖田を担いで引きずる。

沖田が若く20代だとしても、もう男であって身体も大きく、重い女にはきつい仕事だ。

それでも、浪士を斬りつけながら必死に出口へと向かって歩いた。自然と汗が滲み出し、息が上がる。

しかし、気にする暇など何処にもなかった。

カンナはただ、皆が無事で会って欲しいと願うばかりだ。

面識もない人たちに入れ込むなど珍しいとカンナはつくづく思う。

ようやく池田屋をでたところ、カンナは驚いた。

最初から来ていると思っていた隊士達が居ないのだ。

だとすると、今現在ここではカンナを含め、新選組は11人ということになる。

カンナの知る歴史では、確かに今と変わらぬ状況なのだが、

彼女は池田屋であると事前に知らせたはずである。

何故来ていないのか。

そして、経った今戦っているのはわずか6人だ。

カンナ、沖田、それから今頃は3人の隊士が怪我を負って動けないはずである。

あと、どれくらいで応援はやってくるだろうか。

沖田の様子を確認しながら待っていた。

舞い込んだ蝶 其の参

カンナは連れ出した沖田を置いていける筈もなく、
沖田のすぐ隣りで足の先をばたばたと上下させている。
まだかまだかと待つばかりである。

ふと、遠くに大勢の足音を聞き、やっとかと音のする方へ身体を向
けてみれば、

その足音は新選組の応援ではなく、会津藩、桑名藩の応援だ。

先に来るのは新選組のはずではなかったか？等と思いつつも、
カンナは焦っていた。

このままでは新選組ではなく、会津藩らの手中に手柄はおさまって
しまう。

この状況は、カンナ一人で引き留めなければならなかった。

・・・さて、どうしたものか。

とにかく、カンナは池田屋の前に立ちほだかるようにして仁王立ち
した。

何も言うことなど決まっては居なかった。

下手をすれば、斬られてしまう可能性だって無いわけではない。

しかし、この場に新選組隊士が誰一人としてこちらに手が回らない
以上、

何とかするしかない。

特に新選組に義理立てするようなことはされていないが、
ただ、興味があった。

カンナの祖先が居る新選組に。

先祖がどのようにして新選組で働いてきたのか、どんな人だったのか
どれだけ剣術が強かったのか、気になった。

そして、このカンナの持つ刀の持ち主でもあるため、一度でも良いから

話してみたかった。

藩の応援で来た大勢の兵がカンナを前にして立ち止まった。

一番前で兵を引き連れている人物はなかなかの巨漢でさらにかなりのコワ顔だ。普通ならば、後ずさりしているところだろうが、そんなわけにはいかない。

「その女、我らを通さんか。」

この男は、声もでかく、低かった。

迫力がある。兵を引き連れ上に立つだけの力はあるのだろう。しかし、カンナは怯まずに真っ直ぐと睨みつける。

「嫌よ。あなた達を入れるわけにはいかない。」

これは平和に対処したいものだ。

せめて冷静に堂々としているべきだろう。

ここで縮みこまってしまえば、完全に押されてしまう。それは避けたかった。

「我らは会津藩の者であるぞ。」

「ふーん。だから？・・・あなた達ねえ、この中の状況知らないですよ。」

今、この中では激しい斬り合いが続いている。

敵か味方かなんて見分けてる暇なんて無いの。判断出来るのは、あの新選組の

象徴である浅葱色の羽織だけ。

あんたらがそんな普通の格好で入っていったら、敵だと見なされて斬られるだけよ。

分かるかしら。まあ、無駄死にはしたくないでしょうからここで待機。」

巨漢はグツと黙り込み、唇をかむが負けを認めたくないのかまだ、無理矢理なことを吐く。

「しかし、・・・戦力が足りぬのではないか？ たった10人で討ち入ったと

聴いていたのだが。」

「ええ。10人ではいつてつたわ。でも手助けはいらわないわよ。なにせ、隊の中でも優秀な幹部が揃ってるもの。

あんた達が入っていったとしてもこんな小さな宿だもの。邪魔になるに決まってるわ。」

会津藩らはどうしても手柄を取りたいようだ。

しかし、カンナがそれを許さない。

冷静でいたいと思っているカンナも少々いらついてきている。

「大人しく待機してなさいよ。

それとも、そんなに手柄が欲しいの？

・・・だったら、何処よりも早く駆けつけなさいよ。

あなた達にこの件の手柄を取る資格なんてない。遅れたんだから。

・・・とにかく、今回はあなた達の仕事はない。あるとしたら、後始末ね。」

カンナは透き通った瞳で睨みつけ、兵が地面に座り込むのを確認し

てから

辺りを見回した。

兵達が座り込むと目の前の景色がスッキリとした……と思えば、既に新選組の応援は兵の後ろに来ていた。

カンナは気まずい空気から逃れようと再び池田屋内へと歩き出した。

「待て。女子が何だつてこんな所にいる？」

カンナは目でその声の人物を捕らえると、

その人物は、カンナが会いたいと願った者だった。

あのひとである。

写真では服装も髪型も年齢も違っていたが、やはりあの新選組の副長である土方歳三だ。間違いは無い。

この者はカンナの祖先に当たる人物であり、彼女の持つ刀の持ち主でもある。

「……貴方に……会うためです。」

それだけを言つて宿内へと入る。

沖田の事は、もう心配ないだろう。

カンナの後から応援の隊士達がぞろぞろと入ってくる。

これで安心だ。

……と思いい刀を抜くと、一人の若い隊士がカンナの肩を叩く。

「あの、これ副長が貴方にと。」

そう言つて手渡されたのは、無造作にたたまれた浅葱色の隊服だ。

受け取るとまだ暖かった。

先ほどまで土方が着ていたものなのだろう。

「ありがとう。」

さりげなくお礼を言って羽織を羽織った。

少し大きくぶかぶかな気もしたが文句は言えなかった。

羽織ると、ほのかに懐かしい香りがした。

それは、祖父が床に伏せていても必ず焚いていた香の香りだ。

木の良い香りがする香で、カンナはそれが好きだった。

そんな香りのする羽織を血で汚すのは気がひけたが、

浪士が斬りかかってきたため気にする暇は無かった。

そうして、夜は明け新選組の隊士では1名が死亡、5名が重傷を負い、

その中の2名は重傷により後に亡くなる事になる。

この事件はカンナの予測した通り「池田屋事件」と呼ばれた。

蝶の正体

池田屋事件が幕を閉じ、新選組は大手柄だ。

カンナは池田屋で何人もの人を斬った。

刀は瞬く間に血に染まり、血を吸った。

人を斬るといふものは、殺すといふものは気持ちの良いものではない。

しかし、斬らねばならなかった。

そういう状況にあったのである。

今、カンナは池田屋から出た。

討ち入りのあつたこの宿は酷い有様だ。

障子が破れ、血しぶきの痕を残しているのは勿論のこと、宿内は

死人の山で溢れ、刀傷が壁に刻まれている。

更に、勝手場の飲み水はあかく染まり飲めたものではない。

こんな幕末の時代であるが故にこのような光景がある。

カンナはその光景を目に刻みこんだ。

忘れてしまいたくは無かったのだ。忘れてしまつては、勇敢に戦い続けた者が

浮かばれぬ。そう感じた。

カンナは血に濡れた刀の剣先を真つ直ぐと空へ向け、池田屋に掲げる。

そんなカンナを土方歳三はただひとり見ていた。

刀を掲げるカンナは歳三の目に美しく映った。

刀を振つても尚乱れぬ結い上げた金の髪、そして意志の強さを含む

金色の瞳、

哀しげな横顔が朝日に照らされ、数段艶やかになる。

血で赤くなつた姿は鬼の姫とも言えるまでの強さと美しさ、それから武士の誇りがそこにはあつた。

歳三は息を飲んだ。

それほどまでにカンナの放つオーラは偉大であつた。

カンナが刀を下ろし、ため息が口から出た時、

歳三はふと疑問を口にした。

「お前、ここに居るのは俺に会うためだと言つたな。何故だ。」

「貴方を尊敬しているから。・・・」

歳三は、また恋か・・・と思つてしまふ。しかし、カンナの話はまだ続いていた。

「私は、確かめたかつた。貴方がどんな人で、どんな風に仕事をこなしているか。」

噂なんかじゃなくてこの目で確かめたかつた。」

カンナにとって、確かに歳三は尊敬に値する人物だったが、歳三の性格や趣味、仕事は正確には現代に残されてはいない。

故に自分で確かめなければ、納得がいかぬのだ。

「何故、この池田屋に出入りしていた？」

質問攻めであるが、特に嘘を吐く必要もなく、淡々と応える。

「無理矢理連れてこられて、でも、じきに貴方がここに来ると思っ
たから。」

「・・・ここで、隊士の方に会合の事を知らせただけど、
伝わらなかつたみたいね。」

「全く知らねえ女を信じるわけねえだろ。」

カンナの伝言は確かに伝わっていたが、信じてもらえなかったとい
うことだった。

カンナは思った。これは、当たり前ではないか。

・・・ひとを一番信じていないのは自分ではないのか。

自分がひとを信じていないのに、自分に対しての信頼を求めるのは
間違いではないか。

「・・・そうね。」

「ああ・・・。まあ、とりあえずお前の話をもっと聞きたい。」

だが、そつちも色々と用事があるだろ。今日は良く寝て、明日中に
新選組屯所に

来い。俺が居ないようなら、誰か幹部が居るはずだからそいつに頼
んで待たせてもらえ。」

歳三の申し出はカンナにとって嬉しいものだった。

しかし、少し困ることがあった。

金は無いらし、着物もこの血で汚れたものしかない。
つまり、泊まる宿も無ければ、着るものもない。

「……はい。」

これはどうにかするしかないだろう。

こんな治安の悪い京で野宿なんてしてしまえば、何が起こるか分からない。

そして明日までに着物を調達しなければ新選組屯所など行けそうにない。

カンナは新選組から離れ、朝日が照らす道を歩いた。

……カンナとしては、小学校の劇やら演技などは好まなかったのだが。

カンナは人の良さそうな女性が入っていった茶屋に目を付ける。

そして、バンバンと戸を叩き……

「お願い！……つたすけて！！誰か！！！！！」

なかなかの演技だ。

これならば、だれも疑いはしないだろう。

カンナの取り乱した声と行動に、さっきの女性が急いで出て来て、カンナの両肩をつかんだ。

「あんだ、どしたん！？・・・つとりあえず、入りい。」

カナナは女性に守られるようにして家の中へ上がった。
・・・これがカナナの取った一番手っ取り早い方法だ。

カナナは、小さく息を吐いた。

大物女優カンナ

カンナは、しくしくと涙を流し、ある家が上がっていた。

「大丈夫や。・・・」

正体の知れないカンナを家に入れる親切な女性は、カンナの背をさすって

なだめていた。

「怖かったやろねえ・・・。あないな所に巻き込まれはって・・・。

」

カンナは再び嗚咽を漏らし、泣き始め、頷く。

暫く泣きやまず、仕舞いには、女性に優しく抱きしめられる。

しかし、この抱きしめられた時は演技でもなく、本当に泣きそうになった。

こんなにも優しさを近くに感じたのは初めてだった。

だから、なるべく長く優しさを感じていたくて暫く泣きやまない事にした。

・・・ようやくカンナは満足し、泣きやんだ。

「・・・ご迷惑・・・おかけして申し訳・・・ありません。」

「そんなこと、いいんよ。全く、・・・壬生浪も祭りの日ぐらい、静かにしとつたらええのになあ。」

6月6日は、祇園祭で人が賑わっている。
住民としては、騒ぎを起こさず、祭りを楽しみたいのだろう。
祭りの日に騒ぎが起こっては、外へ出ることも避けたいくなる。
祭りどころではない。

「・・・あの、・・・実は私、池田屋で住み込みで働いて・・・
頼れる人も・・・ついでなくて・・・」

「そうやったの。・・・そや。うちに暫く居たらええ。
ちゃんと、仕事もあるんやさかい。」

カンナは思い通りにことが進んでホッと安心する。

「・・・では、・・・本当に暫くの間だけ、よろしくお願い致します。
す。」

私は、名を敢菜かんなと申します」

カンナが頭を下げると女性は元氣の良い笑顔で声を張った。

「あたしは勝かついうのんや。よろしく。あんたはべっぴんやから、
商売繁盛しやはるんやないかね？」

この女性の笑顔には、人を元気づける力がある。
カンナは自然と自分も笑顔になっていることに気が付きはしなかつ
た。

現代では笑わないカンナが、この時代ではいとも簡単に笑顔になる。
そんなこの時代は、純粹に綺麗だと言えるのではないだろうか。

嘘は、どんな時代にもあるものだが、現代よりはずっと少なく
また、人の笑顔は輝いている。
笑顔だけは、偽りのないものだった。

カナナはこの掛茶屋かちぢやで働くことになった。

掛茶屋は、宿のようなもので料理や酒も出している。
着物は勝のものを頂いた。

お古であるらしいのだが、随分と新しそうに見えた。
柄も色も鮮やかで勝のものではないような気もしたのだが、聞きは
しなかった。

カナナは初日から、急ぎよ料理を頼まれてしまい、少々この時代特
有の

火の扱いに戸惑ってしまったが、何とか作り終えた。
それを客に出してきた勝は、ニコニコとしている。

「敢那ちゃん、ありがとうねえ。あの煮物が評判ええんやわ。
これからも色々と作ってくれはったら嬉しいんやけど。」

カナナは嬉しかった。

人にこんな風に必要とされることが、こんなにも嬉しいとは思いま
しなかった。

涙が出そうだったが、泣くところではないとこらえる。

「はい。作らせてください。」

カンナは、この時代に来てまもないうちに着物の着方を覚え、火の扱いも慣れ始めていた。
こんなに早く慣れるものなのかと思っていたが、早く慣れるのはありがたい事だった。

ガラス玉

池田屋事件のあった次の日のこと……。
カンナは道に迷っていた。

(……。ここは……。さっきも通った……。かも？
……。新選組の屯所って何処お???)

カンナは、頭を抱えて行ったり来たりを繰り返していた。
そんな様子を見ている人々は確かに大勢居るのだが、誰一人として
声を掛けてはくれない。

それは、カンナが異常な変わり者だからだ。

外見が異人なのに着物を着こなし、更におなごなのに刀を持って歩
いている。

まさかおなごが刀を抜くとは思っていないだろうが、やはり、近づ
きたくはないのだ。

(ん?……。そっか。この頃の屯所って、壬生寺の近くだって本に
書いてあったな。

……。うん。壬生浪^{みぎろ}って呼ばれてるぐらいだし。

これぐらい聞け。……。一言ですむはず!)

カンナは気合いを入れて周りの人に聞こうと気合いを入れた。

「あのお、すみません……。」

カンナが声を掛けたのはいかにも気の弱そうな商人だったのだが、

逆に絡まれるよりはましだと思っことにした。
その商人は肩をふるわせたが、逃げずに対応してくれた。

「壬生寺って何処にあるか分かります？」

カンナの普通のおなごの問いかけに安心したのか、
分かりやすくゆっくりと説明をしてくれた。

カンナはお礼を言っ、説明を受けた方向へと歩みを進めた。

説明の通りに歩いていくと、あっという間に壬生寺に着いてしまっ
た。

こんなに簡単で良いものかと思ってしまっのだが……。

そんな時、境内の方から子どももの楽しそうな声が聞こえた。

カンナは子どもが好きだった。

大人は嘘が多くて汚いが、子どもはまだそんなことを知らなくて純
粋だからか、

一緒にいると安心できて、汚れた社会のすすで汚れてしまっ自分
を綺麗に癒してくれる。そんな感覚があるのだ。

カンナは声のする方へと向かい、子ども達の姿を見た。

そして、先ほどは陰になっていてわかりずらかったが、

子ども達の輪の中には池田屋事件の際にカンナが外まで担いでいっ
た、

沖田総司が居るではないか。

喀血して倒れたというのに、翌日にはもう既に子どもと走り回っ
ている。

何という回復力だろうか。

しかし、本当に回復しているのだろうか……。

カンナは気になって声を掛けた。

「こんにちは。．．．ねえ、あなたたち、今日の所はこれぐらいにしてくれるかな？」

「．．．このお兄さんね、疲れちゃってるの。今日ぐらい、休ませてあげて。」

子ども達は頬を膨らませてカンナを見る。

「．．．じゃあ、今日は私と一緒に遊ぼう。お兄さんが元気になったら、

もっと楽しく遊べるよ。」

子ども達は、納得してカンナの手を引っ張った。

沖田は首をかしげて不思議そうな顔をしているがカンナはそんな視線を無視した。

カンナと子ども達だけで遊んでいれば、沖田も帰ると思ったのだが、子ども達が帰るまでずっと座って見ていたようだった。

子ども達は、カンナが気に入ったのか満面の笑みを見せ、カンナの取り合いまで

始めた。しかし、カンナはそれを沈めて見せた。

カンナの子ども達に向ける柔らかい笑顔は安心感をあたえ、人を良く寄せ付けた。

そんなカンナに子ども達はまた遊んでと言った。

子ども達が帰って、沖田はようやく立ち上がった。

「君、子どもの扱いが慣れてるんだね。」

沖田は人を殺すとは思えない程優しい笑顔を向けた。

「慣れているというか、基本的に子どもが好きで。だって、子どもは純粹で嘘がないから。」

沖田は「そう。一とさりげなく返した。

「それより、昨日倒れた人がこんな所で遊んでるなんて・・・。全く・・・怪我人が何してるんだか。」

カナナは呆れてため息を吐く。

あえて、病人とは言わなかった。

沖田は、下を見て苦笑いをした。

「もう・・・君も過保護かあ。しょうがないなあ。」

屯所に行くんでしょ。一緒に行こう。これなら、いくら方向音痴の人でも

迷わないよ。」

沖田には、カナナが迷って何とか壬生寺にたどり着いたことが分かっていた。

沖田は妙に鋭い所がある。

だからだろうか。子どもとの駆け引きが上手い。

沖田とは、屯所までの短い時間で随分と話し込んだ。
それでカンナには沖田の本質が見えた。

沖田は、史実上の通り好青年だ。
そして、良く人をからかう所があるが、本当は仲間思いで子どもにも好かれる
綺麗で透き通った心の持ち主だ。

そんな彼が、刀を手にすれば鬼へと化し、稽古でも隊士をめった打ちにするというのだから
何とも恐ろしいものだ。

鬼

「着いちゃった。・・・ここだよ。おいで。」

カンナは沖田の後をついて行く。

しかし、なんだか先ほどから視線を何度も感じていた。

それは、平隊士達のものだった。

全く女に興味を示さなかった沖田が美しい、しかも異人の女を連れてきたのだから

驚いているのだろう。

沖田は機嫌が良さそうにニコニコとしながら前を歩く。

隊士達の視線は全く気にもしていないようだ。

そして、カンナが沖田と共に屯所内を歩いていると、どこからか異様な殺気を感じ、それと同時に隊士達はさっさと逃げていった。

沖田も面倒臭そうな顔をして足早に歩き出す。

カンナはそんな行動の理由も知らないままとにかくとついて行く。

すると、後ろから殺気の持ち主の怒声が響き渡る。

「総司！！！てめえ！！どこ行ってやがった!？」

「・・・っこわ・・・」

沖田は冷や汗をかいてつぶやき、急にぴたりと止まった。

カンナは止まっては欲しくなかった。

怒声は今までに出会ったこともないくらいの怖さだ。

なるべく真っ向から受けたくはない・・・そう思っていたのだ。

怒声を発する男から守るように沖田はカナナを自分の背で隠した。完全には隠れきれなかったのだが……。そしてついに目の前に恐ろしい男がやってくる。

「ほらほら、この子怯えちゃってるじゃないですか。もう少し穏やかになってくださいよ。・ね、土方副長。」

カナナは初めて知った。

この恐ろしい男があのだ。土方歳三なのだ。

そして、自分の祖先なのだ。

カナナは震えていた訳ではないのだが、ついに思った事を口に出してしまった。

「はあ……。鬼……。かあ。」

「ああ!?!」

歳三は眉間に皺を寄せ、沖田を避けようとするが沖田は決して避けようとはせず、

そのまま笑い出した。

「言われちゃいましたね。やっぱり、あんた鬼なんですよ。」

沖田が笑うと、歳三の眉間の皺は消え去った。

歳三は怒るところか、苦笑いをして腕組みをする。

「さて、お前の後ろにいる女は誰だ。」

歳三は気づいていない。それとも忘れてしまったのか……。

「嫌ですねえ。あんたがこの子を呼んだんでしょうよ。」

沖田が言って歳三はよつやく気づく。

この女は自分が来いと言いつけたあの何処が変わった女なのだ。

沖田は、はつとした歳三の様子を見てすつとカンナの前をどいた。

すると、確かにあの時の勇敢で歳三に忠実だと物語っている瞳がそこにはあった。

「そうか……。すまねえな。」

本気で謝る歳三を見て笑う沖田だったが、視線が急に自分へ向けられるとは予想していなかったらしい。

「だがな、総司。……お前は体調も万全じゃねえのにいったい何処をほつつき歩いてやがった!？」

シユンとしてカンナに謝っていた歳三の顔は同一人物とは思えないほどに鬼の顔へと変化していた。

しかし、カンナはひとつ確かなことを発見した。

歳三は曲がったことを嫌う性分であり、更に頭も回るらしい。さぞ、信頼度も高いことだろう。

故に、隊士達はこの歳三が鬼であり、恐れているものであったとし

てもしつかりと
歳三の後についていくのだ。

暫くして沖田への説教がすんだとき、歳三は腕組みをしながら力
ンナに目を向けた。

「そっぴゃあ、名を聞いていなかったな。俺は、新選組副長を務め
る土方歳三だ。」

「かな敢菜です。」

カナナは簡単に名だけを言う。
そして、カナナは副長室へと案内され、そこで色々と話が聞かれる
事になった。

歳三はというと、何故この女を呼んでしまったのだろうかと自分の
行動に疑問を持った。

今まで女にそこまで興味をそそられなかった歳三だが、今回だけは
この異人の様な美しい女に
興味を抱いた。

何故この女はこんなにもそこらにいる町娘と秀囲気がかけ離れてい
るのだろうか。

そして、何のためにこのような線の細い女が刀を手にし、勇敢に戦うのだろうか。

どうやって、監察方の隊士を見破り自分に会合の場所を伝えたのだろうか。

・・・などと、歳三の頭の中は疑問でいっぱいであった。

武士

カンナは、今、あの鬼の部屋ですつと背筋を伸ばし、座ったところだ。

先に座り、カンナの様子を見ていた歳三は、どこか違和感を感じていた。

カンナが自分の左側に刀を静かに置く仕草は本物の武士よりも武士らしい何かがある。

ただの女ではなかったのか。

「さて、お話・・・とは？」

カンナは歳三の目を真っ直ぐ見て先手を取った。

歳三もカンナの目を真っ直ぐと見ている・・・というよりも、睨みつけている。

歳三は見極めているのだ。

カンナが信用できるか出来ないかを。

そして、敵か、味方か。

「お前は、俺に会うために池田屋に居たんだっただな。

どうやって、潜入した？ あそこはあの日、貸し切りで他人のお前には入れなかったはずだ。」

「巻き込まれたのよ。桂小五郎に無理矢理連れていかれたの。」

カナナは、桂の顔を思い出し、深くため息をついた。もう、祖先だろうが、何だろうが敬語は嫌になってしまった。

「やっぱり居やがったのか。・・・だが、なんだって敵か味方かわからねえ奴を・・・。」

「・・・ただ、珍しかったんでしょ。私が・・・。」

カナナは結い上げた金色の髪を撫でた。

やはり、この世界で、それも日本で、この容姿は異質なのだ。日本人でもあり、イタリア人でもある。

外国を打ち払おうと言っているこの幕末で、カナナの様なハーフなど居るだろうか。

居るとしたなら、きっと周りからは色々と言われていることだろう。なんだか空気がしんみりとしてしまい、カナナは話を変えた。

「ああ、ところで私ね。今、池田屋の近くにある藤ってお茶屋で働かせてもらってるの。良かったら、そのうち寄ってって。私の作る自慢のご飯、食べさせてあげる。」

カナナは自然と笑顔になっていた。

少し血の臭いが漂っているけれど、この幕末の世はあまりにも綺麗だから。

それに、少し懐かしい気がするの。この町の雰囲気とか。

カンナはこの時代に来たことを嬉しく思った。

「藤？・・・ああ、あのちいせえ茶屋か。時間があれば、寄ることにする。」

「うん。・・・あと、私いつでも新選組の力になるから。もし、力が必要になったら声かけて。」

カンナは新選組が好きだ。
脱藩者や百姓、町人の多い新選組だが、金を稼ごうと考えていようが、お上の役に立とうと考えていようが、どちらも同じ。自分にとって大切な者を守ろうとしている。

そういう所が好きだ。
よほど想っていないければ、規律が厳しく、さらに多く危険が伴う新選組には入らないだろう。

一人一人が命をかけて大切な者を守っているから、だから手を貸したいと思う。

輝き

カンナはその後、歳三と少し話して、早々と部屋を出た。未来から来たことを言ったりはしなかった。知られてもどうにもならない。

ただ、混乱するだけだ。余計な事を聞かれる前にカンナは歳三から離れた。

しかし、わざわざ離れたのも無駄になった。

「おい、結局お前は何者だ？」

歳三がカンナを追いかけてきたのだ。

「私は………わからない。

………ただ、貴方と一緒に戦いたい。貴方の役に立ちたい。」

カンナにとって、歳三はただ一人の信じられる人だった。

親もクラスメイトも誰も信じられなかった。

だけど、歳三だけは信じられた。

何故かは、自分自身でもわかってなどいないのだが。

「だからお願い。信じなくてもいいから少し位頼って。」

わかってる。矛盾してるって。

でも、信じるなんて私が言う資格ないの。

だけど、私は誰かに必要とされたい。

今まで、必要にされたことは無かったから。

カンナの必死な目に歳三は息を大きく吐く。
そして、笑ったのだ。

「何言ってるんだ。信じねえか信じるかなんてお前えの行動しだいだろうが。」

信じられる努力をしろ。」

カンナにはわからない。

「努力？・・・？」

「ああ。まずは己がひとを信じねえと始まらねえ。」

そう言っただけで笑う歳三の顔は清々しくてこれから先の未来は上手いくように
思えた。

「ありがとう。・・・トシ。」

急に親しく呼ばれ、歳三は少し戸惑ったが、カンナが笑って歳三を見ているから
よしとした。

・・・と突然、どこからか明るい声が聞こえた。

『あ、土方さんが女の子くどいてる。』

そして、二人が歳三の背後へと視線を向ければそこにニコニコとした総司が幼い子どものように可愛らしくピョコリと現れた。

「そ」そんなことあるわけないじゃない!」 は?」

歳三がそんなことはないかと否定する前にカンナがバツサリと完全否定した。

「だって、トシよ?こんな不器用な男が女の子を口説くなんて信じられないでしょ。」

「っていうか、それ以前にトシがそんなことしてたら気持ち悪い」

カンナは本気の顔で言った。

総司は笑いをこらえ、歳三はヒクツと片頬を引きつらせた。

そんな二人の反応にカンナはきよとんと首をかしげる。

その行動が歳三をまた怒らせる。

「誰が . . . 気持ち悪いだってえ?」

カンナと総司はただならぬ殺気を感じたために急いで走り出した。

それに歳三は大声を上げる。

カンナは声を出して笑った。

何年ぶりだろう。こんな風に大声で笑ったのは。
すごく気持ちがいい。賑やかで楽しくて、いつまで私は彼らと共に
居られるのだろう。
ずっとこんな風に笑って居られればいいな。
そう思う。

遠くである三人の男はカンナと総司と歳三の様子を見ていた。

「誰だ？あの子？左之、知ってるかあ？」

「ああ？知らねえよ。」

「・・・にしてもさあ、すごい綺麗なひとだよなあ・・・。
見たことねえぜ。」

そして、三人は最後までカンナ達の様子を見届けたのだった。

刀

カンナは暫く新選組屯所に留まっていた。

帰ろうと支度をしていた所、一人の男に声を掛けられたのだ。その男は斉藤一といって、有名な新選組の副長助勤である。カンナの持ち歩く一振りの刀が気になっただけならいい。断る理由もなく、仕方ないが刀を見せる事にした。

一はするりと刀を抜きじつくりと目を凝らして柄から切先まで丁寧に見ていく。

「かなりの年代物だが、素晴らしい大技物だ。・・・これは・・・兼定か？」

一は、刀一筋ではないのかと思わせるほどに。

「あたりよ。・・・それにしても見る目があるのね。貴方自身の刀、国重も流行してはいないけれどしっかり自分に合ったもの

みたいだし。自分に合ったものを見つけるのは難しいのに。」

一は黙ってしまふ。

しかし、やっと口を開く。

「あんたは、刀が好きか？」

「嫌い。」

カンナの早い応えに一はふつと笑う。

そして、視線で更に深く問いつめてくる。

「・・・刀は・・・人を殺すための道具だから。それに、刀は綺麗すぎる・・・だから嫌。」

一は何を思ったのかは知らぬが、なにやら顎に手を添えて考え出した。

そんな一を見て、カンナは小さく笑った。

「でも、好きでもあるの。」

すると、意味がわからないとでも言いたそうに眉をひそめる。

「刀は、私を裏切らないでしょう？」

そのカンナの答えに一は一には似合わぬイタズラ小僧の様な笑みを浮かべた。

同時にカンナの手の平へと刀が戻ってきた。

「俺は斉藤だ。あんたの名は何と申す？」

「敢菜。勇敢の敢に菜の花の菜とかくの。」

本当はカタカナでカンナとかくのだが、この幕末ではカタカナは通じない。
単なる当て字だ。

「敢菜か。覚えておく。」

そう言うて一は去ろうとしていたが、カンナはひとつ気になっていた。

「刀が好きか」と聞いていた彼の目が酷く哀しい物に見えて……。
どうしてもそれを見ぬふりなど出来るはずも無かった。

「あなたは？刀は好き？」

一は苦しげに目を細め、風の音が聞こえてくるほど静かに言う。
「気に入らぬ……何もかも。」

カンナは思った。

彼は私と同じだ。人を信じられず、常に人を疑って生きている。
そして、彼と私の違う所は人を斬った数。

乱世ですつと過ごしてきた彼は、数えられぬ程の人を斬ってきたことだろう。

自分の感情をどこかにおとして、冷酷にためらいもなく斬る。

彼は刀のように鋭くて冷酷なように見えてしまいが、本当は違うの
だろう。

感情を心をどこかに忘れてきてしまっただけで。

いつか、本当の彼と向き合うことが出来るのだろうか。

私は向き合ってみたい。

本当の彼は熱く、優しい心の持ち主だとそう、直感しているから。

記憶の言葉

ーおかえりー

かつさんの、そんな一言が私の心を暖かく包んだ。
何処でも聞く当たり前の言葉の筈なのに。

何故？

その答えは私に向けられた言葉ではなかったから。
でも、今のは自分に向けられているもの。

ーただいまー

私はその言葉に応じて当たり前前に返した。
自分の口からこの言葉が自然と出たことには驚いた。
自分では経験していなくとも、周りの常識が身体に染みついている
のだろう。

この世界に来てからというものの、新鮮な感覚ばかり。
でも、暖かい町の雰囲気は何処か懐かしかった。
どこかに似ている。

・・・あぁ・・・祖父の家だ。

祖父の家に行つたことなど一度しかないが、見渡す限り現代的なビルなどが立ち並ぶ

東京の中心部に、ちょこんと寂しく建つていたのを覚えている。そこだけ、今のような雰囲気があった。

周りの雰囲気は冷たいだけに、その家は暖かく感じた。

しかし、家の中には誰の気配もしない。家の奥には確かに息をして床に伏せる

祖父がたつた一人居たのだが。

息絶えそうな祖父が目を向けて寂しそうにため息を吐いた。

祖父が見ていたのは、簡素な部屋に不釣り合いな一振りの刀だった。随分と柄が擦り切れ、汚れてしまつてはいたがそれにはただならぬ存在感があつた。

同時にここにあるのはおかしいと直感した。

「持つてゆきなさい・・・」

祖父は私に刀を託そうとした。

息絶えそうなのに声を必死に出してまでして。

「お前の父になど託せぬ。・・・それはあの土方歳三の刀・・・
いすみのかみかねさだ
和泉守兼定という大業物だ。」

驚いた。

土方歳三といえは、有名な新選組の副長で、最後まで指揮官として戦つたすごい人。

そして、世間では悪者扱い。

それは、新政府軍が勝つてしまつたから。

最近是新選組に人気が出てきたけれど、それも本やゲームのなかの新選組で、けつして本物ではない。

「覚えておきなさい……。お前は土方歳三の子孫にあたる。誇りをもつて生きなさい。」

子孫？

あてにならない。そう思っていた。

けど、信じざるを得なかった。

何故かというところ、祖父の家には土方歳三の姉に送った文や、これはどうかとも思うが、

歳三宛と思われる恋文が山のように押し入れのなかで眠っていた。

勿論、歳三の句集もあった。そして、刀。

揃いすぎていた。何もかもが。

戸籍だって頼んで調べて貰った。その結果は確かに同じで、信じるしか無かった。

刀は祖父から貰い受け、いつも傍に置いた。学校でも気にせず身近に置いた。

銃刀法違反なんて、無くなったようなもので、同じように法律も条例も意味をなさなかった。

私が刀を貰い受けたのは世界が終わるちょうど一年前だったから。

武器でも持たないと外も歩けない。安心できない。そんな狂った世の中に成り果てていた。

そのうち、学校も停止になった。

私は家族も飼い猫もお金も大切な物も手放した。けど、剣道だけは兼定だけは手放さなかった。

剣道は心の支え。いつも傍にあった。

剣道は私の身体の一部だから。生きてさえ居れば、必ず私の後につ

いてくる。

だから、生きたいと願った。

まだ、兼定と共に有りたいたい。剣道を手放したくは無いと。

……そうだ……。

ここへ来る寸前、誰かの声が聞こえたんだっけ。

心に響き染みいるような低い男の人の声だった。あそこには誰もいなかったはず。

……その声を聞いたとき、胸が激しく高鳴って、何かの残像のような記憶のようなものが

頭に流れたんだ。

それは、私の記憶になどないものだった。

その記憶は残酷なもので、一面が兵と彼らの血で埋め尽くされていた。

そんな風景の真ん中でたった一人の刀を持った男の人が立ち尽くしていた。

その人は涙を流し、血に染まった胸に手を当てていた。

悲しさと寂しさ、そして悔しさに満ちた光景。知らぬ間に私も涙を流していた様な気がする。

「俺はこのような所で死なんっ……。必ず……。つ貴方のもとへ……参りますっ……」

その人の瞳にあったのは純粹な忠義。

そして、もう一つの記憶。

先ほどとは違う男の人で、迫り来る敵を次々と斬り捨て、必死に前

を見て進んでいた気がする。

「俺は・・・何のために人を斬ってんだ？・・・もう、守ってやる奴もいねえっていうのによ。」

その人の瞳には怒りと悲しみ。

戦の中で自分の道を見失ってしまった男の姿だった。

その姿を見たとき、自然と私の口から誰かの名が出た。

その名が何だったかは全く思い出せないのだが、きっとその人のことだろう。

不思議だった。

自分の中に全く覚えのない記憶があることに私自身が驚いた。

その記憶とその中の男達の言葉に何の意味があるのか、何を伝えたのか

答えは出ないままだ。

2つの星

カンナはある日の早朝、朝餉の支度のため、庭の井戸で水を汲んでいた。

勿論、兼定も共にある。

それにしても、カンナの身体は早起きの生活になかなかついていけない。

身体が石のように重い。

口から出てくるのはため息ばかりだ。

そんな時、急に誰かに腕を掴まれ引つ張られた。

しかし、そんなことで身を抑えられてしまうほど鈍くはない。

カンナはとっさに身を翻し、利き手ではない左手で刀を抜いた。

カンナは刀を背負うようにして持ち歩くため、どちらの手でも容易に抜くことが出来る。

刀を相手の急所首筋で寸止めした。

しかし、カンナの刀ははじかれた。相手がかろうじて小太刀で抑えたのだ。

・・・この人・・・なかなか。

カンナは面白そうに笑みを漏らした。

「ああ・・・油断してしまいましたねえ・・・。どうか刀をおろして下さいますか？」

相手は苦笑い。

女だからと油断していたに違いない。

「どうしようかしら・・・女だからってなめんじやないわよ。

朝餉の支度を邪魔されて刀まで抜いてこっちは疲れてるんだから。」

カンナは大きいため息を吐いて怒りをあらわにした。

そんなカンナの態度を男は少しばかり恐れた。

女は恐いものだ・・・と。

「・・・申し訳ない・・・。実は少しばかり頼み・・・」

男が何かを言うのをやめたとき、遠くから3人ほどの足音が耳に届いた。

男はばつの悪い様な顔をして庭に入ってきた。

カンナとしては注意をしたいとこだが、足音は速さを増し近づいてくる。

カンナはまたもやため息を吐いた。
面倒事が増えたのだから。

「その女。綺麗な身なりをした長身の男を見かけては居ないか。」

三人。同じ羽織を身にまとっている。

何処かで見たとのことのあるものだと思えば……

「確か、あつちの方だったと思いますけれど。」

「協力感謝する。失礼。……馬鹿者！！早く行くぞ！」

私をじっと見ていた二人に対して一人の男が早く来いと促した。
全く……私はそんなに妖しい？

それにしても……

「あなた、新選組に追われてるのね。」

「ええ。……事情がありました。」

カンナは先に言っていた頼み事というのが気になっていた。

「・・・そこで、『何も言わないで。』・・・」

「庇いきれなくなる。・・・あがって。」

カンナは分かっていた。

この男が長州にとって必要な人物であることくらい。

こんな綺麗な身なりをした男がただの不逞浪士だと思えるだろうか。

カンナはこの男を匿うことにした。

新選組の敵であるだろうがそんなことはどうでも良くなってしまった。

カンナはただ、己を信じ、真っ直ぐ突き進む者に手を貸す。
敵味方など関係はない。

「私はカンナ。貴方は？」

「私は、みちたけ通武ともうします。」

カンナはその名を何処かで聞いたことがあった。

誰かの本名であつたはず。

「上の名は？」

男は少し戸惑つたがゆっくりと声をだす。

「……ありません。」

嘘。

そんなことは分かり切っている。

しかし、あえて聞かなかつた。

聞いても、悪いことしか起こらない。じきに思い出せるだろう。

それをまつしかない。

それにしても正直な男だ。

嘘も簡単につけない。そんなんで、この時代を生きていけるのか。

でも、正直な人は嫌いじゃない。

むしろ興味がある。それで何処まで行けるのか。

「しっかりと働いてよ。最近は人手が足りないらしいの。」

通武はかつさんにも受け入れられ、なんとかここで暫く過ごせるようになった。

よく働いた。その仕事っぷりには私もかつさんも驚いた。

そして、ときどき彼は句や短歌を詠む。

そのときの声は澄んでいてとてもきれいだつた。

そんな彼をかつさんは気に入っていた。

私も結構気に入っていると思う。特に彼の純粹さや優しさは私にと

って眩しいものでしかなく、近くにいるだけで自分も輝くがする。

そして、ある日私がおつかいから帰れば、眩しい笑顔で通武は迎えてくれた。

そこには、かつさんの笑顔もあって前よりもより暖かく感じた。

ーおかえりなさい。ー ーおかえり。ー

その声が二つある。

それだけなのに妙に嬉しかった。

私はもうふたりを家族のように思い始めていた。

そんな自分に少しばかり違和感を感じたが、この暖かい場所に居たいがために

それを無視する。

そして笑顔で返す。

ーただいま。ー

故郷の味

私が新選組の屯所を訪れてから早六日。
この時代に来てからも随分経った。

それにしてもちようど夕飯時だからお客はだんだんと増えてきている。
6月というのもあって京の町は夏の気候になり始め、仕事もきつくなる。

「いらっしやいませ!」「おおきに。」

私たちの元気な声がお店に響く。

それはとても気持ちがいい。バイトなんてものはたったの一度もしたことはないから
働きがいがあるということがこんなにも楽しい事だとは知らなかった。

「邪魔するぜ。」

お店に訪れたのは3人の男性客。
皆若い方だったが、特に小柄な方は少年の様な明るさと無邪気さがあつた。

そのお客が席について一息吐いたのを確認してから注文を取る。それは常識。

まずはお店の雰囲気慣れてくつろいで貰わなければ。

「いらつしゃいませ。」注文はどうなさいますか？

「……んー……あなたのお薦めで頼む。」

「俺も!!」

「同じの頼む。」

この店は初めてのお客だ。

最高においしいものをお出ししたい。

それでもって、口に合う物を。それがかつさんのモットー。

そんな細かい気遣いがあるからこそ常連客も多い。

「あの、つかぬことをお聞きしますが出身は……」

こう言ったとき、たいていの人は私を疑う。

長州や薩摩、土佐の人なんかは特に。

「……ん？出身か？……伊予だが……」

「俺は松前だ。」

「俺は・・・江戸。」

「わかりました。では、少々お待ち下さい。」

私は早くつくつてしまわねばと急いでいた。

「なあ、あんた、もしかしてこの前新選組の屯所に行つてなかったか？」

その時は急いでいたから答えるヒマも無かった。

そうだと言つのように笑つたつもりだ。

近くには通武もいたから言つてしまつたら誤解を招く気がした。

「どうです？敢菜さん、もうできてますか。」

「ええ。今できたわ。通武さんはあの常連さんに持って行って。」

念のため、通武はあの3人の客から遠ざけた。

同じ長州や薩摩関連の人の可能性もあるけど、新選組の可能性だつてある。

なんだかんだいっても、私は通武を手放したく無いのかも知れない。

「お待たせしました。私のお薦めでよろしいですね。」

「ああ。・・・おつ。うまそうだな。」

そういえば、この人はよく見てみると男前かもしれない。それに、槍を持つてる。

私は槍にも結構興味がある。

・・・確か、新選組だとすれば十番隊組長の原田左之助が当てはまる。

出身が伊予で槍術を使つて。

「うわっ。うまっ・・・。」

少年が一言漏らしているのを聞いて私は嬉しくなった。

ここでご飯を作っているとたくさんの人がおいしいと言ってくれる。それは今までにない感覚だ。

「これはうめえ。食ったことのない味だがしっくりくる。」

おかしい……。

間違えてしまっただろうか。

この人は松前の出身では？松前の味付けで出したはずだ。

「申し訳ありません。松前の味付けのはずが……。」

「ん？あつ・いや……そういうわけじゃあねえんだ。」

どういう訳であろうか……。

間違って「いるのならば、ハッキリといってほしい。」

「そうだな。こいつの場合、生まれは松前だが、育ちはほとんど江戸だからな。」

気にすることあねえと思うぜ。」

原田左之助っぽい人がそう言う。

……そうだったか……。

今度からは育ちは何処かと聞かなければいけないかもしれない。

「そうかあ……これが松前の味が……。」

しみじみと独り言を言っているのを聞いてみると、私も北海道の街並みが少しだけ

恋しく感じる。まだ平和だった頃の街並みだ。

「それにしたって、ここは良い店だな。繁盛してるのも分かる。」

「ほんとそうだよなあ！江戸の飯なんて久しぶりに食ったぜ。ちよ
うど京の飯には
飽きてたんだよ。」

「うまかった。またよろしくな。」

なんとか喜んでもらえたようだ。
少し勘違いはあったものの、松前の味は口に合ったようで。

「はい。またいらして下さいね。」

「おう。・・・そういや、さっきの質問には答えてくれねえのか？」

どうやら、さっきの笑みでは分からなかったらしい。
どうするべきか・・・。

「貴方は、新選組の組長さん？」

まずはここから。へたに言ってしまうと後がきつくなる。
こちらとしても向こうとしても慎重にことを進めるのがいい！

「ああ。・・・そうだが。」

「原田左之助さん・・・とか？」

「あたりだな。……で？」

どうしても答えを聞きたい……。そんな顔をしている。

「……土方さんと沖田さんと斉藤さんはお元気？それから、山崎さんも。」

山崎さんとは一度しか会っていない。

池田屋の前で一度伝令として会ったつきり。

原田さんは笑った。

それはもう無邪気に。

何が面白いのかは知らないけれど。

「あんだ、とんだ変わり者だな。鬼副長と新選組一、二の剣客と恐れられる総司と斉藤なんかとこわがらえで付き合うなんて、そこから男でもなかなか出来ねえぜ。」

「やっぱりあの時の子なのか！」

「俺でもあの鬼副長と関わるのはゴメンだ……。」

新選組の中でもそんなに恐れられていたなんて驚きだ。

土方さんは不器用だけど優しい普通の男だと思うのだけど。

沖田さんだって、性格は子どもっぽくて憎めない。

斉藤さんも一見冷たいように見えるけど仲間思いなところがある。仲間思いなひとが悪い人なわけではない。

「優しい人よ。そうそう、疲れてるみたいだったから時々休ませてね。」

それと、沖田さんにもお大事にして伝えて。」

「ははっ。かみさんみたいだな。」

そうなのか？・・・

私には親なんていないようなものだったから分からない。

「あと、土方さんと斉藤さんには一度お店に来てって伝えておいて。」

使いつ走りみたいだけど、きっとコミュニケーションを取るきつかけにもなる・・・はず。

山崎さんはいつものように来てくれてるし。（多分監視でも頼まれてるのだと思うけど。）

沖田さんは暫く養生の筈だから来てなんて言えないし。

「わかった。しっかり伝えとくから安心しろよ。・・・あと、俺は原田左之助だ。」

急に言うものだから少し対応出来ないで居た。

「俺は藤堂平助！」

「永倉新八だ。また、松前の味、頼むな。」

原田さんは何となくで分かったけれど、他の二人も幹部だったんだ・
・。

・・・藤堂さんって・・・こんなに若かったんだ・・・。

「私は敢菜です。伊予の原田さんに、江戸の藤堂さん、それから松前と江戸の永倉さん

ですね。また、いらっしゃってください。」

3人は勘定を払って帰っていった。

なんだか、3人ともご機嫌で・・・。

そんな後ろ姿を見ていると、私自身の気分もすごく良く感じた。

一の俊才

あつという間に月日が経ち、七月の早朝カンナは縁側でお茶を手に何かを深く考えていた。

「はぁ……。どうしよ……。」

「敢菜さん？どうなさったんです？」

隣で同じように茶を飲む通武も心配してカンナの顔をのぞき込む。カンナも通武の顔を見つめる。

すると通武は急に困った顔をして瞳を潤わせた。そしてふいつと顔を逸らしてしまう。

カンナはそんな通武を可愛らしく愛しく思った。

通武は大人だが子どもだ。

いつもは大人びた優しい笑顔を見せるのに、時折、子どものように照れたり、

カンナが意地悪を試みれば、頬をほんのり赤らめてふくれる……と思えば、

急に無邪気に笑ってみたり、ただの遊びに夢中になってみたり。

確実にカンナよりも年上ではあるのだが、どうもそうとは思えない。

「……通武ってさ、剣術出来るわよね。」

「は？……ええ、まあ……。」

「それならさ、ちょっと付き合つてよ。腕なまっちゃってるから。」

カンナの悩みはこれだった。

最近の店が忙しくて鍛錬も出来ないのだ。

腕も鈍る。

「よろこんでお付き合い致しますよ。せつかくの、休業日ですからね。」

カンナたちは竹刀を持たないために、庭で真剣を構えた。

「ねえ、・・・私さ、貴方の本名まだ知らないの。」

通武は動揺しているのか瞳を揺らしている。

カンナは知りたかった。

正体を知つてどうこうという訳ではない。

ただ純粹に信用されているという証が欲しかった。

通武がどんな人物だとしても追い出そうとは思わない。

どんな人物でも、通武は今まで一緒に過ごしてきた家族だ。

何があつても守りたい。

「・・・それは・・・」

「私は信用ない？」

「そんなことはっ。・・・！」

「じゃあ、教えて。・・・私も教えてあげる。」

「……え？……なぜ……」

何故女である私が偽名を使っているか？

……それは、私自身、この時代に生きてはいけない人間だから。だから、未来には居ない架空の人物になるうとした。まずは名前だけでも。

「私は……土方カナ。カナは漢字じゃなくてカタカナなの。」
すこし、不安だった。

土方という名字はそうそういるもんじゃないし、土方歳三は有名だから。

親戚かと思われるかも。

でも、信じてみようと思った。通武が私を拒絶するはずないって。

「……カナさんは私を信用してくださった……こんな私を。」

通武は願った通り拒絶なんてしなかった。だって、優しく嬉しそうに笑ってる。

「私もお教えします。……私は……」

私は…… 久坂玄瑞 と申します。……」

ああ……そうだった。

通武という名は久坂玄瑞の改名前の名だった。
ずっと思い出せないでいたけれど。

「そう。……ありがとう。信用してくれて。貴方は、もう私の家族。」

「え？……驚かないのですか？」

「うん。なんとなく、そこら辺の人だろうな……とは思っていたから。」

玄瑞は困ったように笑った。

「では、今一度、参ります。」

カンナは急に地を蹴った。

あっという間に玄瑞の正面まで来てしまう。

「なっ！・・・くっ」

さすが長州一の俊才・・・久坂玄瑞。

どんなに不意打ちでもすぐに反応して防いでくる。

「ふふっ。やばい！・・・楽しいかもっ！」

剣術を楽しいと思ったのは久しぶりだ。

この時代に来てからは本当に人斬りばかりで、正直きつかった。重かった。たった一人の命がこんなにも重く儚いものだと思っただけで初めて知った。

家族の大切さも初めて知った。

初めてが多すぎて頭がついていけないけれど、確かなのは、前よりも幸せだった事。

笑っていられるって事。

「ふっ・・・。・・・カンナさんはお強い！誠に女子でございませうか！？」

玄瑞は笑ってる。

私も笑ってる。

「失礼ね！そのうちっ・・・強い女が流行るわよ！」

「そっでしようか!？」

庭で刀がぶつかり合う音が心地よく響く。

結局、決着は付かなかった。
でも、やっぱり私が押されていた時間の方が長かったと思う。

「はぁ……つつかれたぁ……。」

「そうですね。それにしても、カンナさんがこれほどまでとは思いませんでした。」

「女は馬鹿に出来ないね。」

「ははっ。ええ。そうですね。気を付けましょう。」

庭で打ち合ったのはいいが、刀のぶつかり合う音に、かつさんが物騒だと言って

二人して子どものように叱られてしまった。

でも、気持ちが悪かった。

誰かと汗を流して、叱られて、笑い合っ

私は幸せな時間を過ごしていた。

しかし、私はどうして気が付かなかったんだろう。

玄瑞にだんだんと近づいてくる悪魔の足音に。

いつまでも幸せは続かないととっくに分かっているはずなのに。

悲劇 其の一

私は、守りたかったただけだ。
大切な、かけがえのない家族を。

七月十八日 夕方

「では、カンナさん。行ってきます。」

「うん。楽しんできて。久しぶりに親友に会うのでしょう?」

「はい。」

笑って返事はするものの、嬉しそうではない。

むしろ、通武の笑顔は何処か悲しみを帯びていた。

もう既に、このとき、おかしいとは思っていたのだ。

しかし、今までの生活が幸せすぎて、平和すぎて、気持ちが緩んでいた。

そのため、本来気付くであろうことに気付けなかった。

「行ってらっしゃい。」

「近いうちに戻ります。・・・行ってきます。」

何故、手を振ってしまったのだろう。

このとき、無理にでも引き留めていれば・・・。

何時だっただろうか。

七月一九日の早朝だった。

私は、珍しく自然と目が覚め、寝着のまま縁側へ出て薄暗い空を見上げた。

心の中がざわついて、どうにも落ち着かないのだ。

私は刀を抱きしめ、頬をすり寄せた。

その時、どこからともなく何かの大きな音が鳴り響いた。

カナナはその音の正体を掴むまで少々時間がかかったが、風に乗って漂う火薬の匂いと

久しぶりに嗅ぐ、生々しい血の臭いにその正体をだいたいだいが、掴んだ。

それと共に、どうしようもない不安がこみ上げ、早く行かなければと身体が先に動く。

何故なのかは分からない。

ただ、何か大切なものがこの世からすつと消えていってしまつような、そんな感じがした。

カンナは着物に素早く着替え、刀を背にくくりつけ、かつさんの反対を押し切つてまで駆けだした。

私には正直、何が起こっているのか、この足が何処に進んでいるのか全く検討が付かない。

それに未だ京の都に慣れない私にはここの地理などさっぱりな筈で考えなければ……。

……えつと……今は元治元年の七月一九日……早朝……それから……大砲……あぁっ……もう少して出てきそう……

……あ……玄瑞は、どうしてる？……あれ？……玄……瑞？あっっ！！

「……っ禁門の……変！」

だとすれば、玄瑞が……！

早く……早くっ！！

だんだんと男達の必死に生きようとするうめき声や、刀のぶつかり合う音、それから、

先ほどと同じ、大砲の音が大きくなってきた。

どうやら、この足に全てを任せて良いらしい。

しかし、やはり、この足では速さに限界があった。

ようやくここまでたどり着いたは良いけれど、もう日が昇りさんさんと太陽が武士達を照らし付けていた。まだ間に合うか！？

・・・とにかく私は玄瑞・・・いや・・・通武のもとへ行きたい。
久坂玄瑞・・・確か、鷹司邸へ行けば会えるはず。
・・・こっち！

カナナは立ち向かう者全てを切り伏せ、無事に鷹司邸にたどり着く。

・・・どこ！？

・・・気配がするかも・・・。

カナナは思うままに足を進めた。

カナナは敵に出会うことも、斬り合いになることも恐れはしなかった。

しかし、一つだけ恐れていることがある。

・・・どうか無事でいて欲しい。

それだけがカナナの頭の中を占めていた。

この向こうにいる。

カナナは直感した。

ただ、会いたいがためにカナナは勢いよく襖を開けた。

すると、カナナの直感が当たっていたようで、通武はその部屋のど真ん中にいた。

しかし・・・

通武は既に、ぐったりとしていて、通武の座る床には血が水たまりのように広がっている。
血の量にも驚いたが、まだまだその血は止めどなく流れて、いつそう水たまりを広げていた。

「通武っっ！！！！！！」

カンナは血で汚れるのも気にせず、通武に駆け寄り抱き起こした。
やはり、切腹だった。

歴史はそう簡単には変わらないものだ。
最初から決まっていたことのように人が傷つき死んでいく。
自分の無力さに腹が立った。

「・・・っ通・・・武え！！・・・通武っっっ！！！！」

カンナはとっさに通武の腹に刺さる小刀ごと傷口をおさえ、何度も何度もその名を呼んだ。
近くにいたのでからわかる。

微かにでも息はあるのだ。しかし、夏であるというのに、通武の指先やつま先は氷のように冷たくなってきた。

「ねえ・・・。通武・・・。お願い・・・生きてよ。」

「……………っ…カナ……さ……。どうして……このよ
うな……ところ……るに。」

微かに通武の声がした。

驚きよりもまだ生きていることへの嬉しさの方が勝っていた。

「通武っ！…！」

「ははっ……そんなに……叫ば……なく……ともっ……。」

「どうして？……切腹なんて。」

いつの間にか、カナの目には涙がうつすらと滲んでいた。

「私は……武……士……ですから……。」

武士なんて身分、どうでも良かった。

切腹なんて、ただの自殺では無いのか……。

「家族なのにつ！……大切なものにつ！…！」

「カナ……さん……。どうか……笑って……いて……ください。
……泣かないで……ください。」

気付かぬ内に涙が溢れ、通武の頬まで濡らしていた。

笑えと言われても、カナには無理なお願いだ。

この状況で、笑えというのか？

「うるさいっ……。生きていれば、笑顔など何時だって……。」

「ははっ……。そうです……。ね……。生き……。られる……。でしょうか？」

カナナは大きく頷いた。

諦めて欲しくなかった。しかし、分かっていたのだ。もう手遅れだということ。

だから、こんなにも涙が溢れる。

「……。最期に……。カナナ……。さん……。」

「最期じゃないっ!!」

通武は穏やかな笑みを漏らした。

「聞いて……。くだ……。さい。」

そう言われてしまっつては、黙るしかない。

カナナは溢れる涙を止めようとはせず、黙り込んだ。

「……。っ……。カナナ……。……。私は……。貴方が……。好き……。です……。」

貴方の……。笑顔がっ……。言葉が……。私を……。闇……。から……。引きずりだして……。くれた。

……。幸せ……。でした……。……。初めて……。人を……。愛し、過ぐすことが……。幸せ……。だと知りまし……。た……。……。本当に……。感謝しても……。しきれぬ……。よう……。で……。。」

カナナの目には先ほどとは比にならぬほど涙をためている。

・・・つ通武・・・。

生きてよ。死なないでよ。

家族でしょう？・・・この先生きていれば、・・・もっとたくさんの
幸せを知れるんだよ？

「通・・・武え・・・。」

「泣かないで・・・と・・・言った・・・でしょう。」

涙を止める方法なんて・・・知るわけないでしょう？

「生きて・・・。。置いていかないで・・・。」

通武はふつと笑い、冷たくて大きい手でカンナの頬を優しく包んだ。

「カンナ・・・。良いですか・・・？・・・よく・・・聞いて・・・くださ
い・・・。。。」

・・・早く・・・ここを出て・・・かつさん・・・と・・・安全な・・・と
ころ・・・へ。

・・・京は・・・焼かれて・・・しまい・・・ます・・・。」

「無理にきまつて・・・。」

「カンナっ！・・・時間が・・・ないんです・・・。。。。私を・・・捨てて
・・・いきなさい！

・・・早く・・・早くっつ！！！！！！」

いつの間にか駆けだしていた。

でも、通武は傍にいない。

通武の必死な声に突き動かされた。

………っ……私は……通武を……捨てた。
最低だ。

家族といえるまでに、愛していたのに。大切だったのに。

ただただ、走った。

泣きながら必死に走った。

自分の侵した罪から逃げるように。

通武の死を認めまいと。否定したかった。

帰ればまた、あの穏やかな顔で笑いかけてくれる。

そう、信じたかった。

カンナさん。・・・どうか、どうか・・・幸せに生きて下さい。
誰にも負けぬぐらい・・・。

「・・・っ・・・カンナさん・・・。私は・・・っ・・・いつだっ
て・・・

貴方を・・・愛して・・・います・・・から・・・っ。
・・・幸せ・・・に・・・いき・・・て・・・。」

久坂玄瑞・・・通武 は静かにこの世を去った。

通武は、一人で死んでいった。

しかし、カンナが去るとき、通武はカンナにある冊子を託した。

その中には、今までに詠んできた句と切腹の前に詠んだ辞世の句が
綴られている。

通武は息を引き取る前、あることに気付いたのだという。

「・・・ああ・・・カンナさん、私は忘れていたようです。

・・・私は決して、一人ではないということ。愛

しい、家族が居ることを。」

そして、通武が一番に願ったこと。

「カンナさん、必ずや・・・幸せに生きて下さい。・・・もう悔いな

ど、ありがとうございます。

カンナさん。

本当に・・・大好きでした。 |

悲劇 其の貳

カンナは何も考えずにただ、足の向く方へと走っていた。しかし、カンナの頭の中では通武の声が響き続けていた。今までの生活の中で触れてきた通武の暖かい言葉や仕草がとても恋しく感じていた。

「カンナさん、私は決めました。・・・私は、貴方という家族を守るために

この剣をふるいます。」

そう言った通武の顔には嬉しそうな笑顔があつて、子どもらしさがあつて、

本気で言ってくれていることが嬉しかった。

「初めて、大切だと思える人が出来たんです。全力で、守らせて下さい。」

もともと、カンナと通武は似たようなものだった。

愛を知らず、幸せを知らず、何も無い道を歩いてきた。

しかし、カンナはこの時代に来たことで、幸せを知った。

通武はカンナに出会ったことで愛を知った。

「カンナさん、愛しています。」

この言葉が、通武のカンナに対する精一杯の愛だった。早く行きなさいときつく言ったのも、愛だった。

通武の起こす行動、言葉全てが愛の塊で、暖かった。

カンナは知った。

こんなにも人に愛されていたのだと。

愛する者がこの世から消えていってしまうのがこんなにも哀しく寂しいのだと。

どれぐらい走っただろうか。

戦場と家を走って往復するにはさすがのカンナでも無理があった。カンナの足は道を教えてくれるものの、疲れてしまえば全くの役立たずだ。

カンナは休むしか無かった。

どんなにまた走り出そうとしても、全く足が動いてくれず、林の中で倒れるように

腰を下ろした。

マラソンどころの疲れではなかった。

口の中には鉄のような味が広がっている。

着物であるため、身体は重く、暑く、動きにくかった。

辺りには、水もなく、下手をすれば熱中症になりそうだ。

暫くして、カンナは走り出した。

ずっと休んでいるわけにはいかなかった。

通武が望んでいるのは、カンナとかつの安全であり、また、

カナナはもう大切な家族をなくしたくはなかった。

京が燃える……。

通武はそう言っていた。カナナの知る歴史でもそうになっていた。かつは無事であろうか。

カナナの頭の中には通武の笑顔とかつの笑顔が浮かんでいた。

あの輝くような笑顔を見れなくなってしまうのは愛を知ったカナナにとって

絶望的だ。

カナナは町に近づいているのだと知った。

それは、ある意味悲しいことでもあった。

焦げ臭い匂いが鼻についている。京が燃えているのだ。

この焦げ臭い匂いが町に近づいているという事を知らせたのだ。

カナナは焦った。

通武だけではなく、かつも失ってしまうのかと。

カナナはほんの少しの生きているという望みを持って、わずかな力を振り絞り走った。

町に着き、かつの店へと向かったはいいのだが、

向かう途中の店や家は炎に包まれ、ごうごうと恐ろしい音を立てて

いた。

道には、大火傷をし、転がっている者も少なくない。

店は、無事だろうか。

かつは生きているだろうか。怪我を負ってはいないだろうか。そんな心配ばかりがだんだんと募っていく。

途中、ちらちらと通武が心配になったが、かつも心配だった。

どこもかしこも赤い風景ばかりで悪い事ばかりを考えてしまう。

道には、無傷の人もわりと居て、水で火を消している。

かつも火を消している。きっとそうだと思いたかった。

しかし、それは、現実にはならなかった。

カナナが店に着いたとき、カナナは一瞬頭が真っ白になった。

店はもう、完全に炎の餌食になっていた。

店の前には、店の火を消している人は居るが、その中にかつの姿は無かった。

「あのつつ！！！この店の店主は！？・・・かつさんは何処ですか
つつつ！！！」

「かつさんはまだこの中らしいっ！もうっ・・・駄目かもしれねえ
っ！！！」

カナナはとつさに着物を脱ぎ捨て、襦袢一枚のまま水をかぶった。
そして、刀を持ち炎に立ち向かう。

「嬢ちゃん！！危ねえっ！！もう無理だっつ！！」

そう言う火消しの腕を振り払って中に入った。
カンナは諦めきれなかった。
かつならば、まだ生きているのではないかと思ったのだ。

燃える店の中は思った異常に熱く、長い時間耐えられるものではなかった。

天井から落下してくる瓦礫も赤々と燃えていて、当たれば命はない。店の奥へと進んでいくと、ある部屋の棚の前にかつは倒れていた。しかし、カンナとかつの間には、会つのを許さぬとも言つように炎の壁が立ちはだかっていた。しかし、カンナは気にもとめず、その壁を通り抜けた。水を含んだ襦袢がカンナを守ったのだ。

「かつさん！？・・・かつさん！」

カンナは煙を吸い込まぬように手のひらで口と鼻を覆い、かつの近くへと行った。

煙を吸い込んで身体が動かなくなってしまうたらしい。
意識はあった。

「・・・敢菜ちゃん？・・・何しとるの？・・・早うここから出んと・・・」

「はい！・・・行きましょう！・・・」

カンナがかつの身体を支えて立ち上がるうとしたが、その時、カンナたちの頭上から運の悪いことに大きな瓦礫が音を立てて落下してきた。

カンナはそれにすぐ反応できず、それでもとにかくつを連れて避けなければと足に力を入れた。

しかし、走り続けてきたカンナの足にはそのような力は残っていない、動けなかった。

そして、瓦礫が目の前に来たとき、何故か急に後ろに倒れてしまった。

まるで・・・誰かに突き飛ばされたように・・・。

カンナは暫く理解できずにいた。

かつがカンナを助けるために無理矢理最後の力で突き飛ばしたのだ。そして、瓦礫が床に落ちる大きな音がした。

「・・・かつ・・・さん？　・・・かつさんっ？」

呼んでも呼んでも返事は有るはずがなく、カンナは無意識に燃える瓦礫を掴み、瓦礫をどけようとした。

しかし、瓦礫は燃えていてカンナの手はあつという間に火傷で皮膚が焼けただれてしまった。

カンナはそんな手を見つめた。

・・・何も無い・・・何もかも、なくしてしまった・・・。

自分の中から怒りがこみ上げてくるのがわかる。

この時代に、火を放った奴等に、そして家族を守れなかった自分に腹が立った。

カンナは刀を片手に炎をくぐり、店を出た。

体中が熱い……。

目が熱い……。涙が……。熱い。

カナナはまた走り出した。

自分でも何処へ行くのか解らないでいた。

ずっと走っていると、見えてきたのは数人の男。

何故か、確信した。

この男達が京に火を放つたのだと。

そう思うと、更に怒りが増した。もう自分では制御出来なかった。

「あああああつっ！！」

カナナは一人の男を一撃で斬り倒し、そして、二人目の男を同じ刀で斬り上げる。

カナナはただ自分の想いに、自然に動く体に全て任せ、斬る事だけに目がいつていた。

辺りには血の痕が残り、カナナをも赤く染めていた。

何人斬ったのか覚えていない。

しかし、カナナの気がおさまった時、カナナの周りには八人の男が血を流し転がっていた。

カナナの涙はおさまることが無かった。

仇を討つても、何も変わらなかつた。悔しさも、悲しさも余計に増した。

カナナ自身にはこの気持ちをどうすれば良いのか全く分からず、ただ、赤く染まった地の真ん中に崩れ落ち、泣き叫ぶことしか出来ずにいた。

手

俺たち新選組は援軍として戦場に放り込まれた。

幕府から直々に命が下るなんて事は今までに無かった。

名誉なことだと誰かが言った。

だが、俺にとつちや、そんなことは名誉な事じゃあない。

ただ、戦う駒として適当に放り込まれた……。

そうとしかおもえねえ。

俺たちは敵を追って天王山に来たが、やっと追いついたと思えば、
奴等は皆切腹して、既に果てていた。

何とも哀しいものだと思う。

こいつらにも、家族は居たのだろう。愛する者もいたのだろう。

……上の奴等がこれを見たら、見事だって言うんだろうな。

だが、俺にはそんな事言えっこねえ。

それは、俺が本物の武士じゃねえからか？根っから百姓だからか？

……戦なんてもんは哀しいもんでしかねえんだ。

戦に勝って喜ぶ奴は、どうにかしてんだ。勝ったって、何人もの人
間が犠牲になつて

死んでる。戦自体、喜べる事じゃねえんだよ。

俺たちは天王山で京が火の海になっていると聞くことを聞き、

すぐ町までおりた。

しかし、到着した頃には炎が広範囲に回り、火を消すのにも手が足りていない状況だった。

「おめえら！！火い消せ！！早くしろ！！！！」

『はい！！！！！！』

俺は隊士全員に命令し、俺自身も火を消しに向かった。

そんな時、ある女の顔が頭の中をかすめた。

あの女は変わった奴だった。

異人のようだが、日本人のようでもあって、そして、女の身で自ら戦に突っ込んでいく。

さらには、この俺を怖くないとも言っちまった。

笑顔は本当に美しかったが、何処か哀しそうな顔をしている奴で、寂しそうで……。

「副長！あっちも火がやばい。あっちの方頼むぜ！！」

原田が俺にあっちを頼むと言ってきた。

ああ……あっちは、あの女の働いている店があつたか。

そんなことを思い出すと、何故か酷く心配になった。

全くと言って良いほど面識が無いというのに。

俺はその店の方向へと向かおうとした。

「土方さんっ！僕も手伝います！」

総司が手を貸すと言ってくれてとても助かった。

火を消すのにも、一人ではさすがに難しそうだ。

俺と総司はその店の方へと走った。

店へ着くと、店は酷く燃え、店の前には火を消そうとする一人の男が居た。

「おい！この店の奴は！？」

「店主はもう無理だ！！さっきの・・・金色の髪した嬢ちゃんは泣きながら走っていつちまった！！！」

・・・金色の髪・・・。敢菜しかいねえ。

「どっち行った！？」

「あっちだ！！！」

俺はすぐに駆けた。

本当は火を消すのが俺の仕事だった筈だが、総司も後から付いてきた。

「土方さん！・・・もしかして、敢菜ちゃんですか！？」

「あぁっ！」

総司もそれに気付くと、目の色をかえ、走る速度を上げた。

ただ、あの男の言った方向へ走っていると、急に総司が足を止めた。

「土方さん……。あれって……。」

総司が遠くを見て言った。

俺も目を凝らしてその方向を見た。

誰かが人を斬っている。

「……。つつ敢菜だ！……。」

俺はとにかく敢菜を止めたくて走った。

ある程度近くまで行くと、止める事など出来ない悟った。

総司も息を呑んだ。

敢菜は八人もの敵を相手に一人で戦っているのだ。

そして、既に五人もの死体が彼女の回りにあつた。

思わず足を止めた。

俺は見入った。なんて、哀しい顔をしているんだろう。ただそう思った。

彼女の目から溢れる涙は綺麗で、熱くて、哀しくて胸が痛んだ。

俺たちは敢菜を見ていることしか出来なかった。

彼女は強い。だが、弱い。剣の腕は良い。しかし、心は弱い。

強そうに見えるのだが、そういう奴こそ、心は折れやすかったりする。

今の敢菜は悲しみ泣く獣のようで、それでもって、美しさは健在で、俺が泣きそうになった。

寂しすぎると思った。孤独だと思った。

敢菜はあつという間に八人全員の息の根を止めた。その後、ひざから崩れ落ちた。

「あああああああああああ!!!」

敢菜の泣き叫ぶ声が耳に残った。

哀しすぎる声だった。残酷で悲しい現実が彼女を襲ったのだろう。

そんな彼女を俺はどうにかしてやりたかった。

自分に何が出来るのか、はたまた、救ってやれるのか……。

何も分からない。

だが、俺はいつの間にか敢菜の前に立っていた。

総司は訳が分からぬと言うように立ち尽くしている。

俺には何が出来るのか答えは出ていない。

しかし、助けたいと思った。

「敢菜……。」

俺は敢菜の名を呼んだ。

すると彼女はゆっくりと顔を上げた。

その顔はどれだけ泣いたのだ？と思うほど赤くなっていて、未だ涙が溢れていた。

頬には血もはねていた。
俺は涙と一緒にその血もぬぐった。

「と・・・し・・・？・・・っつ」

「ああ・・・。」

細くてか弱い声に涙が出そうになる。

だが、こらえた。男が泣くなんて情けねえ。

俺はなるべく優しく敢菜を抱きしめた。

彼女の着物は酷く濡れていた。・・・よく見てみれば、こいつ・・・
襦袢一枚じゃねえか？

俺は一度離れ、新選組の羽織を掛けてやった。

夏といえども、今は夜だ。

しかも濡れているときだ。寒いに決まってる。

俺は立ち上がってずっと手を差し出した。

敢菜は首を傾げて俺の目を見た。

「敢菜。・・・新選組に・・・俺んどこに来るか？」

自分の口からこんな言葉が出てくるとは思わなかった。

女人禁制だったのに・・・どうすんだ？

カンナは暫く俺の顔と手を交互に見ていたが、決心したように頷いた。

「・・・っうん・・・。」

そして、震える手で俺の手を取った。
その時、俺はすごく安心したんだ。
なぜだかわからねえが。

敢菜の手の平は腫れぼったく、熱を持っていた。

「帰るぞ。・・・手当してやる。」

敢菜はまた首を傾げた。

「・・・手。火傷してんだろ。」

「・・・つつ・・・あり・・・がと・・・。」

「おう・・・。」

敢菜の手の火傷を気遣い、肩を抱いて歩いて屯所へ帰った。
彼女は屯所に着いても涙を流したままで、俺は改めて彼女の心の傷
が深いことを知った。

さあ・・・どうするか・・・。

俺に、いったい、何が出来るってんだ？

ああ……。

……まあ……とりあえずは手当が先だ。

敢菜を泣きやませるのも、敢菜と話すのもその後だ。

それでいいだろ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1333t/>

北へ・・・

2011年12月24日01時53分発行